

第六章 出版活動

一 主要新刊書

昭和三十六年―四十年の間は、産業界では技術革新と企業合同が、さかんに唱えられた時期であり、公害問題も世人の注意を惹きつつあった。一言でいえば、世はまさに科学技術万能の時代であった。が、自然科学といわず文学科学といわず、学術一切の細分化もまた極めて著しい時代であった。

当社の出版物は、既述のように自然科学・技術関係のものが多くだけ、それだけ、その進歩に伴う必要があった。しかもそれら全般について、要求されることは、原稿完成後出版までの時間を極力短かくし、時期おくれとならないことでもあった。

以下、例によって、各年の主要出版物を列挙しておこう。

まず、便覧・ハンドブック類は、この期間刊行されたのは十九点、うち十一点は改訂版であった。

刊行順にあげると「鋳物便覧」(改訂版)、「土木設計便覧」(改訂版)、「分析化学便覧」、「アイソトープ便覧」、「生産管理便覧」(改訂版)、「鉄鋼便覧」(改訂版)、「マーケティング便覧」、「電子回路ハンドブック」、「化繊便覧」(改訂版)、「熱管理便覧」(改訂版)、「科学写真便覧下巻」(改訂版)、「資材管理便覧」、「用水廃水便覧」、「レオロ

ジー・ハンドブック」、「検査管理便覧」、「化学便覧 応用篇」（「化学便覧」を分冊にして改訂）、「軽合金鋳物便覧」である。

単行書では、昭和三十六年刊行の代表的なものに、当麻喜弘著「ディジタル回路の論理設計入門」、沢瀧作雄著「機械基礎の設計と据付」（改訂版）がある。両著とも実用技術書として、長く多くの人々に利用された。

同じ年の刊行に、日本林業技術協会編「林業百科事典」がある。林産学と日本の森林業関係項目の主要な事項を解説した書物であったが、刊行後一年も経たぬ間に林業基本法が大改訂になったため、販売を中止せざるを得なかった。

昭和三十七年には日本化学会編「防災指針」の刊行を開始した。化学工業における危険物の製造・輸送・貯蔵・使用などに際しての注意を記し、火災、爆発、中毒、傷害、公害などを未然に防ぐための具体的方法を解説したものである。

同年、水渡英二・久保輝一郎・中川有三・早川宗八郎編「粉体―理論と応用」を出版した。その頃の工業界では、まだ固体と液体の取扱いが主で、粉粒体の便利さが語られ始めた頃であったが、本書によって粉体の応用面がひろがり、その後の粉体技術の定本として長く影響力をもっている。

また日本血液学会編「日本血液学全書」の刊行を始めた。この叢書は世界的水準にある日本の血液学研究業績を網羅したもので、この刊行によって、日本における血液学研究は飛躍的に進歩したといわれている。編集責任者の重責を諾された天野重安教授は、昼夜をわかず作業を続け、完結をまたずに逝去された。

昭和三十八年に「ORのための基礎数学」全五巻の刊行が始まった。早稲田大学生産研究所の松田正一・洲之内治男・杉山昌平・出居茂の四教授が、同研究所で早くから研究を始めていた経験によって生れたもので、現実の諸問題を数学的にとらえ、現象を数学的に表現して解説するための基礎を詳述したものである。

同年七月刊行の佐藤知雄編「鉄鋼の顕微鏡写真と解説」は、鉄鋼の熱処理や熱加工による組織変化の典型的例を網羅したもので、金属学関係者から機械材料技術者・溶接技術者に至るまで、ひろい層の人々に与えた影響は甚だ大きかった。

同月、日本マーケティング協会編「製品計画のチェックリスト」を刊行している。編集・執筆関係者が約三年間一五四回という度重なる討論を経て、四〇〇頁のリストにまとめた労作であり、戦後のアメリカ経営手法が、完全に日本の会社に定着したことを示す証拠となる。

化学工学協会編「物性定数」も、昭和三十八年から毎年刊行した。佐藤一雄博士を中心とするグループでまとめたもので、主に欧米諸国の関係主要雑誌約五十点から、化合物の物性値を蒐集・整理し、一般化学工業会社で即時利用可能な内容とする目的だったが、後年の著作権法改定を機に、内容を大幅に改めることになった。

昭和三十九年、電電公社電気通信研究所編「通研叢書」の刊行が始まった。同研究所の世界的レベルに達していた通信技術の集大成を企図したもので最初の巻が小口文一著「マイクロ波およびミリ波回路」で、次に小山次郎著「進行波管」、以後、新美達也著「トランジスタおよびダイオード」、熊谷伝六著「PCM方式概論」、白松豊太郎著「高分子工学の基礎と応用」が、つづいて出版された。

武藤清著「耐震設計シリーズ」は、昭和三十九年から刊行を開始した。東京大学建築学科武藤研究室の研究報文をまとめたもので、日本だけでなく世界の耐震計算規準のもととなったものである。

同年秋から、日本化学会編「実験化学講座」続篇の刊行が始まった。この三、四年前から物理化学的手法や機器による測定・解析が次第にひろまってきたため、それら新分野の内容を、さきの「実験化学講座」を補う意図で企画し、全国の著名な化学者のほとんどの協力を得て、全十六冊の刊行を完了したのは昭和四十二年秋であった。

昭和三十九年冬から、佐藤敬之輔著「文字のデザイン・シリーズ」の刊行が始まった。日本で文字デザインを歴史的に整理し、デザイン理論をレタリング実技に裏づけした最初の業績である。

昭和四十年の出版では、宮内庁生物学御研究所編纂「相模湾産蟹類」を出版する光栄を担ったことを記さなければならぬ。これは、陛下が相模湾で親しくご採集になった蟹類について、世界的な蟹の研究者酒井恒横浜国立大学教授の解説と、数多くの図版を収めた書物で、B五判五五六頁の大冊を、四月二十九日の天皇誕生日に売り出した。発行部数三、〇〇〇部、定価五、〇〇〇円であった。この年四月号の「学燈」には、沼野井春雄博士の「陛下と相模湾」と題する興味ある寄稿がある。発売に先き立って四月二十六日から三十日まで、本店三階の画廊で『相模湾産蟹類』刊行記念資料展」を催し、天皇の写真をはじめ本書に収めた蟹類の新種標本など、原図、カラーイラストなどの諸資料を陳列して好学家の参考に供した。

同年の刊行物に、伊大知良太郎・桐田尚作編「企業の需要予測」がある。需要予測を企業の立場から総合的に計画することを目的としたことで、需要を支配する諸要因との関係を詳述した方法論的集大成である。

11 Maruzen Asian Edition

当社では洋書の廉価版を Maruzen Asian Edition と称して多数刊行した。その経過を多少の重複を省みず記しておくたい。

終戦後、一時、いわゆる海賊版が横行して洋書輸入業者を苦しめた経過については既述した。また当社が、原著出版者の承諾を得た原書を翻刻し、学生や一般研究者の要望に応えたことにも触れた。その最初が昭和二十七年、L. Fieser, M. Fieser 夫妻の “Textbook of Organic Chemistry” であった。まだ洋書購買力の弱い時代であったから大そう好評を受けた。そして年とともにリプリント版洋書の需要が高まって行った。最初は、これらの翻刻洋書を単に翻刻版と呼び、昭和三十四年からはリプリント版と呼んでいたが、やがて当社の洋書翻刻版を、アジア諸国に輸出してよいことになったため、昭和三十五年 Maruzen Asian Edition と称した。